



「内水面養殖業」って、何なの

川や湖で行う養殖業のこと

養殖とは、魚・貝・海そうなどをいろいろ人工的な施設の中で、えさをやったりして育てることをいいます。

日本では、海を利用した養殖業や、川・湖を利用した養殖業が行われています。浅い海で行うものを「海面養殖業」といい、川や湖で行うものを「内水面養殖業」といいます。

内水面養殖業でとれる魚や貝の中では、ウナギがいちばん多く（2万8595トン）、以下、マス類（1万8371トン）、コイ（1万2401トン）、アユ（9775トン）の順となっています。（1998年「日本国勢図会」による。以下同じ）

一方、海面養殖業では、ノリ類が最も多く（37万2700トン）、次いで、ホタテガイ（26万5553トン）、カキ類（22万2853トン）、ブリ類（14万5773トン）の順になっています。変わったところでは、真珠の養殖があり、年間に57トンの真珠が生産されています。

内水面漁業生産量の割合では、漁業のほうが多い

内水面漁業の生産量は、全部で16万7000トンです。その割合をみると、漁業生産量が9万4000トン、養殖業が7万3000トンで、漁業のほうがやや多くなっています。

海面と内水面をいれた全部の漁業生産量は、741万7000トンです。そのうち、海面漁業のほうが98パーセントで、内水面漁業はわずか2パーセントしかありません。

（監修・保岡 孝之）

